
many love

三沼 実里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

many love

【Nコード】

N7384F

【作者名】

三沼 実里

【あらすじ】

恋なんかしないと思っていた主人公、「綾瀬心愛」（あやせここあ）が、ある人に出会い、恋をする話です。心愛の親友、「川原織花」（かわはらおりか）の恋の話も。その他、いろいろな人も恋をします！！

序章

「好きな人なんて、できるワケがない」

小学生の時の私は、ずっとそう思っていた。

でも・・・。

中学生になって、あいつに出会って、・・・その考えは変わった。

この話は、私の、中学生の時の、はなしです。

第一話

「今から言う委員会の人は、放課後、前日準備があるので、残ってください。学級委員、放送委員、学習委員、生活委員……」
はぁ……。またか……。

私は、「綾瀬 心愛」（あやせ ここあ）。ここ、舞風学園附属中学の、1年3組の、学習委員。ついでに言つとくと、付属中学って言うても、別に超エリートとか、お嬢様学校とかいうわけでもない。フツウの市立。

で、本題にもどって。

今日は、文化祭の前日。私は学習委員。つまり、さっきの先生の話からいくと、今日は残されるってこと。

……。本当、最悪。学習委員だけに、学習に関わることは、すべてこっちにまわってくるんだよ？

それに、私はなりたくて学習委員になったわけじゃない。小学校の時に一緒だった人たちに、推薦されてなっただけ。だからよけいに、残されたりすると、ムカつく。

キンコンカンコンン♪×2

「起立！礼！ありがとうございます！」

学級委員（男）の声が、教室内に響く。

とたんに、みんなが騒ぎだす。

私は、そのまま椅子に座った。

「心愛？何ぼーっとしてんの？」

頭上から声がする……って言ったら、おかしいか。

「あ、織花……」

織花っていうのは、私の親友。本名、「川原 織花」（かわはら おりか）。すーっごい美人。しかも、成績優秀、スポーツ万能！だ

から、超カンペキすごい人。

「はあ………」

「……なんで、人の顔見て、ため息つくの………?」

織花がげんな顔をする。

「ごめん……。でもさあ……。ため息つきたくもなるよ。

だって、今日も残されるんだよ?この前だって、残されたばかりなのに。最悪じゃない?」

私は、そう言って机につっぱした。

「何言ってんの。織花だって、残されるから。それに、ちょっとくらい残されたっていいじゃん」

……。前向きだな、織花は。

まあ、それだから、このクラスの学級委員がつとまるんだろうけど。はあ……。本当、織花はすごいな………。

それに比べて、私は……。

まあ、でも、織花がいるなら、少しくらい、残ってもいいかな……。……?

第一話

今、私がいるのは、放課後の教室。まわりには、何人かの人。うち、一人は、織花。

「
・
・
・
何やんのかなあ
・
・
・
」

私は、織花にそう問いかけてみた。

「わかんないけど……。たぶん、展示物を貼ったりとかじゃない？文化祭の、前日準備なんだし」

「なるほどね。あー、面倒くさそうな仕事だなあ……。」

「はい、ちょっと前のほうに集まってください！」

わっ！先生、来てたんだ……。
（気づかなかった……。）

「今から、二つの教室にわかれてもらいます。学級委員と……」

-
-
-

先生が、説明を始めた。

「じゃあ、今からわかれてください」

絶句

最悪じゃん……。織花とわかれちゃうなんて……。

「心愛？どうしたの？早く行かないと、怒られるよ？」

「うん……。わかってるけど……。でも、織花と、ちがうくら

「スでやんなきゃいけないんだよ？もう、ヤダ……」

本当に、最悪。仲がいい人、一人もいない所で、やるなんて……。

「何言っ
てんの！
隣のク
ラスじ
ゃん。そ
れに、た
ぶん、一
時間もか

「からないし。・・・ほら、早く行こ！」

「うん」

織花にうながされるまま、私は指定された教室へと向かった。

．．．にしても、本当、最悪．．．。（前にもこの言葉言った気がする）

何なんだしっ（怒）！！準備なんて、先生がやればいいじゃん！

こっちは、織花と別々のクラスで、やんなきゃいけなくなっちゃってるのにさっ!!

ふう……。 (ストレスたまる……)

もう、教室だ……。

「心愛、あとでね」

あゝあ。織花、行っちゃった。

しょーがない。私も、行くしかないか……。

第三話

「はあ………」

ためいきがでる。

織花とわかれるなんて、サイアクすぎる。

あー！もーっ！

今、教室のドアを、思いっきり強くあけたい気分。なのに、教室のドアは、すでにあいていた。

……こういうの、何て言うんだか……。ことわざで言ったら、
「泣きつ面に蜂」ってところなのかな……？

……まあ、そんな話はもういいや。こんなこと考えてる間に、もう教室の中だし。

えつと……。これからどうすんの……。？つか、先生いないし……。

「あつ。心愛！？」

とつぜん後ろから声がした。

だれ……。？私のこと、知ってる人……。だよ、ね……？

「心愛も、残りだったんだ。さつき、気付かなかったよー」

「あ、凜々加」

凜々加っていうのは、「室田 凜々加」（むろた りりか）のこと。昔、っていうか、小学校、三、四年のときに、けっこう仲がよかった子。

「心愛、何委員なの？うちは、放送委員だけど」

「私は、学習委員なんだ」

……凜々加、小学校のときと、ほとんど変わっていない……。
（テンション高めなことか……）

「へえ。そうなんだ。あ、心愛って、3組だったよね？」

「うん。凜々加は……。4組だったっけ？」

「そう。けっこう楽しいよ。ちよっと問題があるクラスだけどね

（笑）」

「はは………。確かに………」

私は、ちよつと納得して、そして、苦笑した。

でも、よかった。しゃべれる人がいて。ほんと、ひと安心だよ。

「ねえ、凜々加。私たち、何したらいいの？ っていうか、先生は？」

「……あ、そっか。心愛、ちよつと遅れてきたから、まだ説明聞いてなかったんだよね。なんかね。うちらは、技術と美術で作った物を、飾るんだって。で、今、先生は、忘れ物をとりにいつてるよ」

「へー。そうなんだ。ありがと、凜々加」

「うん」

そっか……。意外と、簡単な仕事なんだな……。

「はい、みんな。じゃあ、半分にわかれて、仕事してもらおうか。」

こつからここまでが、技術をやる人で、こつからここまでが、美術のをやる人ね。仕事は、さっき説明したから、わかるよね？ じゃあ、始めてください！！」

始めてくださいって、いわれても……。説明聞いてないんですけど……。つか先生、いたんですか……？

「心愛、早く！ うちらは、美術だよ。こつちこつち！」

あ、そうだ。凜々加がいたんだ。

「あのね。この模造紙に、ガムテープをはるんだって。いつしよにやろっ！」

「うん、いいよ」

つてことで、私は、凜々加といっしよに仕事を始めた。

第四話

模造紙をとってきて、裏返す。そして、ガムテープを取ってきて、紙のはじっこに貼る。

あゝ、面倒くさい！！特に、ガムテープを切るのが面倒くさい・・・。

凜々加は、何も言わずにやってるけど、きっと、同じこと思ってるよね・・・。

「先生。こっち終わったんですけど、次、何したらいいんですかー？」

私の近くにいた先生に、見知らぬ男子が話しかけている。いいなあ・・・。もう、終わったんだ・・・。

こっちは、まだまだ終わりそうにもないのに・・・。（二人だけだし）

「あ、じゃあ、こっち手伝ってあげてくれる？二人だけで、大変そうだから」

えっ！？私たちのところですか・・・？まあ、手伝ってくれるのは、助かるんだけど。

「室田！。何やればいいのー？」

その男子は、いきなり凜々加に話しかけた。

「あ、じゃあ、ガムテープ切って、うちに渡して。じゃ、よろしく！！」

凜々加、ふつーに話してる・・・。

「ねえ、凜々加。あの人のこと、知ってるの？」

私は、小声で凜々加に聞いてみた。

「うん。同じクラスだし」

へえ。じゃあ、4組なんだ。初めて知ったよ。

「はい」

「え？」

いきなり私の前に、ガムテープを持った手がのびてきた。

「ガムテープ、早く取ってよ。えっと……………」

「……………あ、私の名前、わかんないのか……………」

「心愛だよ、山月。かわいいでしょ？」

り、凜々加……………。何言ってるの……………？」

「じゃあ、かわいい心愛ちゃん？はい、ガムテープ」

「……………はあ？……………かわいい心愛ちゃん、って、何？つか、なんで名前で呼んでくるの？」

「……………」

私は、無言でガムテープを取った。

「……………凜々加。あの人、ちょっとおかしいんじゃないの？」

私はまたまた小声で、凜々加にそう言った。

「ああ、山月のことか。まあ、もとからあんなカンジだよ？それって、もとかからおかしいってことだけどさ？」

はあ……………。ほんとに、4組って、変人クラスなんだ……………。(ウ

ワサでは、聞いてたけど……………)

それでも、私は仕事を続けて、そして、終わらせた。

第五話

「さいっあくだよ！もうっ！……！！！」

今は、学校からの帰り道。

全部の仕事を終わらせた私は、織花と一緒に帰ろうとしている。

「もう、聞いてよ、織花！！！！その山月って人！！あれからずっと、私のこと、「かわいい心愛ちゃん」って言うてくるんだよ！？男子がだよ？女子のこと、「ちゃん」づけしてくるんだよ？もう、信じらんない……」

最初は、勢いよく言ってたけど、だんだん声が小さくなってきてしまった。

「もう、心愛は……」

織花が、あきれた目で私のことを見てくる。

「凜々加ちゃん、心愛の名字、その山月って人に、言わなかったんでしょ？だったら、名前で呼ぶしかなかったんじゃないの？で、呼び捨てにするのはヤバいかなあ、って思ったから、「ちゃん」づけしたんじゃない？」

織花が、そう言う。

「じゃあ、なんで、「かわいい」をつけたの？」

私は織花にそう聞いた。

「……その山月って人、素直なんじゃない？」

「あ？何を言い出すのかと思ったら……」

「だって、心愛、ほんとにかわいいし。山月って人は、その感想を、率直に言っただけだよ、きつと」

織花……。ほんと、なんなの……？

「あのね、織花。私、ぜんっぜん、かわいくなんてないから。織花のほうが、すごいかわいいから。そこらへんふまえて、もう一回考え直して」

ちよっと口調がきつくなる。

「もー。あのねえ、心愛は、ほんとにかわいいから。織花、うそついてないから。それと、織花より、心愛のほうが、かわいいよ」
「……織花、やさしいんだね。こんな私のこと、かわいって、いつってくれるんだもん。ほんとに、いい友だちだよ。」

でも、今は、かわいいなんて言われても、うれしくない。むしろ、あの、山月っていう人のことを思い出しちゃって、いらいらしてるぐらい。

ほんとになんなの、あの、山月って人は……。

第六話

なんか、おかしい。

今日の心愛、なんか、おかしい。

心愛は、小学校のときから、男子になんて、見向きもしていなかった。しゃべるときは、たいてい、上から目線でしゃべってたし、まともにしゃべるときは、ほとんどパシっているときだけだった。(つまり、心愛は、男子を自分の支配下に置いていた)

それなのに、きょう、心愛が言っていた、山月って人に対する態度は、なんか、ちがうみたい。

心愛は、男子に見下されたり、からかわれたりすることが、大っ嫌いだった。

もし、そんなことをされれば、心愛は、たぶん、マジギレするだろう。織花のことを待たずに、一人で家に帰っちゃうと思う。

でも、今日はちがった。

織花に、全部のことを話してくれた。そういうときの心愛は、本気でキレていない。

「かわいい心愛ちゃん」って言われたことは、完全に、からかわれている。それを、心愛が、なんとも思わないなんて、おかしすぎる。

もしかして、心愛は、「かわいい心愛ちゃん」って言われたことを、内心では、喜んでいるのかな・・・・・・？
ってことは、心愛は・・・・・・。

えええええーーーーーっ!!!!!!!!!!

い、いや、そんなことないよね。心愛が、山月って人に、ひ、ひとめぼれするなんて・・・・。

心愛が、男子のことを、好きになるなんて・・・・・・。

ない。そんなことは。きつと、ない。

なんてったって、心愛だから。あの、心愛だから。きつと、そんなことは、ない！

あー、もう、こんな話、忘れよう。心愛に言ったら、怒られちゃうし、ね。

第七話

ピンポン♪ ピンポン♪

あの、超意味分かんない、山月って人に会った次の日の朝、（つまり、文化祭の朝）いつものように、織花が、私の家に来た。

「心愛〜。入るよ〜」

「うん。いいよ〜」

ガチャッとドアを開ける音がして、織花が家の中に、入ってくる。

「ちよつと待ってて」

私は、制服に着替えていた途中だったから、そう織花に言った。

そして、急いで制服に着替える。

「ごめん。じゃあ、行こー」

「うん」

私と織花は、外へ出て、歩き始めた。

「今日、文化祭だね」

「うん……」

私は、ちよつと小さな声で、織花に返事した。

だって文化祭が終わったら、また、後片付けのために、あの、山月って人に会わなくちゃいけないから。しかも、織花がいらないなかで。

「心愛。まだ、あの山月って人のこと、気にしてんの？」

言いつらそうに、織花が私に聞いてくる。

「気にしてる、っていうか、ムカついてる、っていうか……」

なんか、微妙な心境」

私は、そう答えた。

「なんで？」

私は、黙っている織花に、聞き返してみた。

「いや、なんとなく。今日、文化祭の片づけとかあるし」

そういう答えが返ってきた。

そんなこんなで、もう学校についた。

そして、教室に入る。

文化祭だから、もうほとんどの人が、そろっている。
今日の文化祭のプログラムは、

- 1、開会の言葉
- 2、校長先生の話
- 3、合唱コンクール（前半）
- 4、各展示場所見学
- 5、合唱コンクール（後半）
- 6、閉会の言葉

そして、後片付け。

あゝあ、面倒くさい。歌うたって、いろんなもの見て、で、後片付け。面倒くさいのオンパレードだよ……。

でも、私は頑張った。ちゃんと歌はうたったし、展示物もしっかり見た。

そして、最後の、後片付けの時間……。

第八話

「じゃあ、あとでね、心愛」

織花と別れて、前日準備をした教室へと向かった。

「心愛っ」

「あ、凜々加！」

凜々加が、私に話しかけてきた。

「今日も残されるなんて、めんどくさいよね」

「うん．．．．．」

声が、小さくなってしまった。

見つけちゃったから。あの、山月って人を。

「．．．心愛？どうしたの？．．．大丈夫？」

それに気づいた凜々加が、私の顔を覗き込むようにして見てきた。

「うん。別に何ともないけど．．．？なんで？」

私は、わざと明るい声を出して言った。

「そう？なら、いいんだけど．．．。なんか、元気ないように見え

たから．．．」

「．．．凜々加、心配してくれてたんだ．．．。

「あっ、かわいい心愛ちゃんじゃん！」

「．．．．．この声は．．．．．。

「あ、山月」

凜々加が、反応する。

やっぱり。でたよ．．．。

「なんで無視すんの、かわいい心愛ちゃん」

「．．．．．」。

「かわいい心愛ちゃん？聞いてますかー？」

「．．．．．（怒）！！！！」

「私の名前は、綾瀬 心愛！！！！なんで、「かわいい」を、つける

ワケ？意味分かんないっ！！！！」

教室に、私に声が響く。

みんながいつせいに、こっちを見る。

「あ……………」

ちよつと後悔した。私、みんなに注目されるの、キライなんだよね。

「だったら、心愛ちゃんでもいいわけ？」

「はあ？」

いきなりの山月の言葉に、思わず声が出る。

「じゃ、これからは、心愛ちゃんって呼ぶから。よろしく。あ、おれの名前は、「山月 隆哉」（やまづき りゅうや）だから」

・・・はあ？なに、いきなり自己紹介してんの、山月^{あいつ}は？

っていうか！！なに、心愛ちゃんって！！なんで名前で呼ぶの！？普通、名字で、「綾瀬」って、呼ぶでしょ？頭、おかしいっ！！絶対！

「心愛。仕事だつて。こっちのやつを、はがすんだつて。いつしよにやろー！！」

「うん……………」

凛々加、今のこと、なんとも思っていないみたい……………。なんで・

…………もう、最悪だよっ！！！！

第九話

「今日は、何にもなかったの、心愛？」

織花が、私に聞いてきた。

「う・・・ん・・・」

返事が途切れる。

本当は、さっきのことを全部いつてもいいんだけど、もう、馬鹿馬鹿しくって、言う気分にもなれない。

「そっか・・・」

織花は、そう言ったあと、黙ってしまった。

気がついたらもう、マンションの前だった。

私と織花は、同じマンション。っていつても、織花は、ここの大家さんの娘だから、あたりまえなんだけど。

実は、織花のお父さんは、社長さんなんだ。お母さんは、そのお手伝いをしている。

だからマンションなんて、何軒も持っているし、いろんなお店を経営している。

だから、織花の家は、すっごいお金持ち。

私のお母さんと、織花のお母さんは、昔、同じ学校で、親友だったらしい。で、今は、このマンションに、けっこう安いお金で、住ませてもらっている。（本当は、けっこう高いマンションらしい）

本当は、織花の家は、マンションではない。すっごい大きい一軒家を持っている。でも、その家の近くに、同じ年くらいの子供が、まったくいなかったらしい。織花のお姉さん、「川原 葉織」（かわらは おり）も、まわりに友達になれるような子がなくて、小学校、中学校で、友達付き合いに、苦労したらしい。

だから、織花のときには、そんな苦労をさせないようにって、こっちにマンションをつくって、住むようにしたらしい。

でも、そのかわり、お父さんとお母さんと、一緒に住めなくなった

んだ。

だから今は、織花は一人暮らし。

ついでにいうと、私も、一人暮らし。

私がちっちゃいころは、家にいてくれたけど、小学生になってから、ちよくちよく家にはいないことが多くなった。

私のお母さんは、航空会社に勤めている。お父さんは、パイロット。だから、残業なんてどころじゃない。家に帰れないことがしばしば。んでもって、私はひとりになってしまった。

妹の、「綾瀬 可恋」（あやせ かれん）もいたんだけど、まだ小さいからって、親戚の家にいる。中学生になったら、戻ってくるみたい。

でも、さみしいなんて、あんまり思わない。もうなれた。それに、織花もいるし。だから、全然平気。

それでも、こんなイライラしているときは、ちょっとだけ、お母さんがいたらなあ、と思う。

だって、愚痴とかこぼせそうだし。

あゝあ、ほんと、あの、山月って、なんなんだろ………？

第十話

あれからというものの、いろんなところで会ったたびに、あの山月に、からかわれまくった。

「かわいい心愛ちゃん」って。

マジふざけてる。信じらんない。

人のこと、馬鹿にしすぎだし!!!

「心愛？何怒ってんの？織花、なんかした？」

えっ・・・？あ、やば。顔に出てたのかも・・・。（今は、学校です）

「あ、いや、別に？怒ってなんかないよ。っていうか、織花が私のことを怒らせるなんて、前代未聞じゃない？」

「あはは、そうだね。織花と心愛って、全然ケンカしたことないもんね」

「そうだよ！」

・・・と、そういう話をしていると、4組の前を通りかかった。

・・・山月あいつに会わなければいいんだけど・・・。

そういうことを思っているときに限って、最悪なことが起きるもの。

「・・・今日さあ、部活あったよな。あっ!!!」

「!!!」

ばちっ!・・・と、二人（山月と心愛）の、視線があつた。

うわっ、でたあ・・・。

「あっ、かわいい心愛ちゃんじゃん。ようっ!!」

・・・。ウザい・・・。

「何？隆哉の知り合い？」

「もしかして、彼女？」

なんて声が、後ろで聞こえてくる。

「いや別に。彼女ではないけど・・・」

否定してんだかしてないんだかわかんない山月あいつの声も、一緒に後ろ

から聞こえる。

「・・・心愛、まだ山月って人に「かわいい心愛ちゃん」って言われてんだね・・・」

ひかえめな口調の質問が、今度はとなりから聞こえる。

「うん・・・」

私は静かに答えた。

はあ、いやだなあ・・・。

って言ってるけど、実際なにかいやなのかわかっていない。

山月が「かわいい心愛ちゃん」って言うてくることなのか、それとも、山月の存在じたいがいやなのか・・・。

もうっ、考えんのがめんどくさいっ！！！！

第十話（後書き）

なんか話が大変なことになっている感じがしますが・・・。
読んでくださってありがとうございます！

第十一話

「心愛、織花っ！遊ぼっ！！」

今は昼休み。私たちは最近ハマりだした、校内かくれんぼをしようとしていた。

あ、校内かくれんぼってというのは、そのまんま、校舎内でかくれんぼをするというもの。

中一にもなつてかくれんぼかよ！ってカンジだけど、先生にバレないようにしなくちゃいけないから、スリルがあつて、結構楽しいんだ。

「じゃんけんぽん！！」

2、3にんがパーを出す。私と織花はチヨキ。

「やった！かった！！」

私と織花はそれぞれ別の方向に逃げた。

私はいつもかくれている、四階のおどり場に行った。

ここは、めったに人が来ない場所で、かくれんぼには最適な場所。

のほろが……。

「……あのさ」

えっ！？うそ、誰がいる……？

えっ、どうしよう……？今ここから動いたら、絶対つかまっちゃうし……。

仕方がないから私は、そばにあったロッカーのかげにかくれた。

「何？どうかした？」

！！待つて、この声って……。

「なんで黙ってんの、室田？」

山月^{あいつ}じゃん！！しかも、もう一人のほうは、凜々加！！

でも、なんでこの二人がここに？

「あのね・・・、私・・・。山月のことが、ずっと前から・・・、
・・・好きだったの！！だから・・・、もしよかったら、つきあっ
て・・・ほしい、です・・・。」

えええええー！！！！

私は驚いて声も出なかった。だから、今は心の中の叫び。

「それだけだから。じゃあ」

「え？あ、ちよつ、と待てよ、室田！？」

走り去って行った凛々加を、ワケのわからない様子で追いかける山
月。

私は気が動転していて、二人から見える位置にいたままだったけど、
二人とも気付かないで行ってしまった。

でも、ビックリ・・・。凛々加が山月のことを好きだったなんて。
文化祭のとき、全然気付かなかった・・・。

にしても、凛々加は山月の、どこを好きになったんだろ・・・？

第十二話

「心愛つて、本当にかくれんば上手だよね？いつつも、どこにかくれてんの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「心愛？聞いてる？心愛つてば！！」

「えっ？あ、何？」

ビックリした・・・・・・・・。織花、私に話しかけてたんだ・・・・・・・・。

「もー。何ボーつとしてんの！！・・・・・・・・なんかあったの？」

織花が心配そうな顔をする。

「いや？別に？・・・・・・・・かくれんばですーっと立ってたから、つかれただけだよ？」

私は笑いながらそう言った。

「そう？それならまあ、いいけど・・・・・・・・」

はあ・・・・・・・・。織花にバレるかと思った。

凜々加、ずっと山月のこと好きだったのかな・・・・・・・・？

山月も、凜々加のこと・・・・・・・・。

あー！！なんで私が、山月のこと気にしてんのかなあ？忘れよ、もう・・・・・・・・。

そして放課後・・・・・・・・。

「今日は部活ないね」

「うん・・・・・・・・」

私と織花は、帰り道にいた。

「あ、でも今日は、職員会議だから、どの部活も休みなんだったね。テニス部だけじゃなかったよ」

「そっいえば、そうだったね」

私は、織花としゃべりながらも、頭の中は凜々加と山月のことあいつでい

っぱいだった。

忘れようと思っても、頭の中から離れない…………。

「バイバイ、心愛」

あ。気が付いたら、もう家の前だった。

「うん。バイバイ、織花」

っていつても、おんなじマンションなんだけどね。

私は家の力ギを開けて、中に入った。

♪
♪

あれ？

ケータイがなかった。

それが、聞き覚えのない着信音。この曲は、何年か前にはやった曲…………。

……凛々加だ。

私は思い出した。昔はすごい凛々加と仲良かったんだもんね。

パカ…………。

私はケータイを開けてみた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7384f/>

many love

2010年10月28日03時17分発行